

調査対象

小学校第6学年、中学校第3学年

調査の目的

- 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

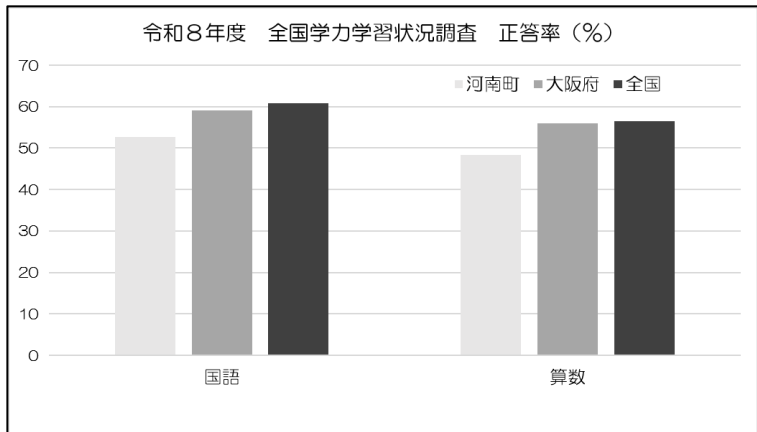
(文部科学省「令和8年度 全国学力・学習状況調査」調査の目的より)

調査内容

- 1 教科に関する調査(小学校:国語、算数、中学校:国語、数学、英語 ※英語は、文部科学省 CBT システムによるオンライン方式(CBT:ComputerBasedTesting)で実施。
出題範囲は、調査する学年の前学年までに含まれる指導事項を原則とし、出題内容は、それぞれの学年・教科に関し、以下のとおりとする。
 - ① 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能 等
 - ② 知識・技能を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力 等
- 2 質問調査
 - ① 児童生徒に対する調査(学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査)
 - ② 学校に対する調査(指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する調査)



町立小中学校の結果



小学校

令和8年度は、国語・算数の2教科を調査しました。国語・算数ともに、大阪府・全国の平均を下回る結果となりました。
 国語:「話すこと・聞くこと」と「書くこと」に成果が見られました。一方、「読むこと」や短答式・記述式、情報を関連付けて表現する力に課題が見られました。
 算数:「データの活用」に成果が見られました。一方、体積の公式、割合・単位量当たりの大きさ、分数の意味を関連付けることや、式や言葉で説明する力に課題が見られました。

設問別に見ると、国語の「資料を活用した表現の工夫を捉える」と「音声表現の工夫の効果を捉える」は、いずれも全国を上回りました。目的や相手を意識し、伝え方を工夫する学習は、町内の成果として今後も継続し、学校間で共有していきます。

一方、「読むこと」では、目的に応じて文章と図表などを結び付け、必要な情報を見つける問題に課題が見られました。

算数では、「概数にする」と「二つの表から集計の誤りと根拠を説明する」が全国を上回りました。これまでに学んだ数の仕組みを使うことや、表の数値を根拠に判断し説明することに、一定の成果が見られました。

一方、記述式の問題には課題が見られました。「立方体の体積を求める式を書く」「異分母分数の大小の理由を書く」「数直線上の1を捉える」などについて、数量の関係を図・式・言葉で表せるよう、引き続き支援していきます。

中学校

町内1校のため正答率の公表はしません。

国語では、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」に府を上回る成果が見られました。数学では「データの活用」、「数と式」で成果が見られました。これらの成果は小学校と同様の傾向があり、小学校からの取り組みが生かされ、基礎・基本の定着が図られていることが分かります。英語では、「聞くこと」、「読むこと」には成果が見られました。一方で、「読んだ内容について考えと理由を書く」と「まとまりのある英文を書く問題」には無解答が目立ち、「書くこと」に課題があることがわかりました。

3教科とも、選択・読み取りの一部には成果が見られる一方、根拠を明確にして考えを記述する問題と、基礎的な知識を文脈の中で活用する問題に課題があります。

小学校

「英語への関心」と「将来の英語活用意向」、「課題解決への主体的な取組」が強みです。「自己肯定感」と「国語理解」、「算数理解」においても良好な結果が得られています。一方で、「授業でのICT機器使用頻度」と「学校図書館利用」については改善が必要です。

※以下、全国・府と比べて肯定的回答の多かった質問について記載します。

- 「自分には、よいところがあると思いますか」
- 「人が困っているときは、進んで助けていますか」
- 「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」
- 「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」
- 「友達関係に満足していますか」
- 「学級会における学級での話し合いを生かして、今、自分が努力すべきことを決めて取り組んでいますか」
- 「国語の授業の内容はよく分かりますか」
- 「算数の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか」
- 「英語の勉強は好きですか」

……他

中学校

「数学理解」「国語理解」「英語の日常的に使う機会」のように授業理解に関する肯定的回答が高いことが強みです。一方、「授業でのICT使用頻度」は小学校と同じく改善が必要です。 ※以下、全国・府と比べて肯定的回答の多かった質問について記載します。

- 「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」
- 「自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか」
- 「普段の生活の中で、幸せな気持ちになることはどれくらいありますか」
- 「分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか」
- 「国語の授業の内容はよく分かりますか」
- 「数学の授業の内容はよく分かりますか」
- 「英語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか」
- 「先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれていると思いますか」

……他

課題解決のために

- (1)基礎・基本の定着が確実に行われるよう、個別最適化された学びの充実を図ります。
- (2)話し合い活動等を多く取り入れ、児童・生徒が互いの意見や考えを高め合う協働的な学びの充実を図ります。
 - ➡ 1人1台端末の更なる活用(AIドリル、共同編集作業など)
 - ➡ 「指導の個別化」と「学習の個性化」
 - ➡ 育成すべき資質・能力の3つの柱を意識した授業改善
- (3)二小一中の公開授業を充実させ、各校の授業改善に取組みます。
 - ➡ 町立小中学校の研究授業をすべて公開授業とする。
 - ➡ 近つ飛鳥小学校におけるSE公開授業を町内学校教員の悉皆研修と位置づける。

より具体的な取組みとして

- 教育長が掲げる3年目の「KANAN BEAM」をより深化させる
- 令和8年度は、「教・育で心揺さぶる仕掛け」をキーワードに、教育に「仕掛け」を設定する。
- 河南町こどもサミットの実施。
- 各校が学力向上に係る取組みを焦点化するために全国学力・学習状況調査から「あと一問」を設定。
- 「あと一問」に粘り強く取り組むための授業改善をめざす。
 - ※ 「あと一問」は特定の教科の特定の領域等の習熟をめざすのではなく、授業改善の視点としての位置づけである。
- 二小一中をスケールメリットとして捉え、町内の学力向上の底上げをめざす。



POINT

A 挑戦する力
M 繋(つな)がる力